「道州制と広域連係を考える講演会」（倉敷会場）

開催日　平成 22 年２月 15 日
場　所　倉敷アイビースクエア
「フローラルコート」

◆講演会
演　題：「地方の活性化と道州制
～地方の論理と主張を考える～」
講　師：大原　謙一郎　氏

皆さんこんにちは。ようこそおいでいただきました。オリンピック、気になりますね。オリンピックの中継を振り切ってここまでお見えいただきまして、本当にありがとうございます。

今、岡本さんの方から話がありました。倉敷の方、かなりおいでだと思います。ご記憶にも新しいかと思いますけれども、去年のあのジャズの祭典は、街中ジャズが鳴り響いていて本当にすごかったですね。大原美術館でも、実は今日のスライドで紹介されなかったのですけれども、大原美術館の分館というところの地下の展示室に、現代のバリバリに今活躍しているアーティストたちの作品を飾っていました。そこでも演奏されたのですけれども、行ってみたけれど入れなかったという方もおいでになったようです。言い訳するわけじゃないですけれども、行ってみたけど入れなかったというのは大原美術館だけじゃなくて、アベニューさんもそうでしたし、ほかのところもそうだったみたいで、本当に大変な盛況でございました。こういうことを倉敷でやるよと言ったら、中四国、あらゆるところからわーっと、「私も来たい」「私も来たい」と集まっていただけて、本当に倉敷は幸せだと思います。そういうことが、今日のテーマである「広域連携」なのですね。

広域でみんなでいろんなことを一緒にやっていくということをやりやすくする一つの仕組みが道州制だということで、お手元にこういうパンフレットがお配りしてあるかと思います。「道州制の導入を目指して」ということで、実は、皆さんご承知かと思いますけれども、道州制について岡山はかなりの先進地域でした。かなり早い時期から、地方自治について本当にいろいろとよくご存じの方々を岡山にお招きしまして、道州制の設計はこういうふうにあるべきだというようなことをいろいろ議論してきました。そして、いくつか大変なメリットがあるのですが、これをご覧いただければと思うのですけれども、やっぱり県というのは、地域を経営する単位としては少し小さいかな、もう少し大きな単位で地域を経営（マネジメント）する方が本当に力が出てくるんじゃないか、それが道州制の一つの基本的な発想だったと思います。「中四国」ということを言いますが、そういうふうになりますと、例えばヨーロッパのいくつかの国、ベルギーなどの国と同じような経済規模を持って、世界に存在を主張できるようになっていくんじゃないか。そういうふうな、

地域をマネジメントするユニットとしていい単位を作っていこうということと、それをやったら、こういうふうなかたちでの広域連携が非常にしやすくなると。

これはこういう文化の面だけではなくて、例えば川ですとかあるいは道路ですとか、いろんなものをきっちり管理していく上では、県境というのはむしろちょっと邪魔になるのですね。あれを取っ払って、みんなで一緒に管理をしていこうよという仕組みを作ったら、もっといいんじゃないだろうかと。あるいはそういうふうなことをやっていくことで、地域がもっと特色のある強いものを主張できる。例えば「中四国州」ということを私たちは言っていますけれども、その中で、今は瀬戸内海というのが中国と四国のなんだか境目になっちゃっているんですね。そうじゃないだろう。中四国を一つにまとめたら、一つの内海になる。もっともっと瀬戸内が生きてくるよというふうな仕組みが作れるんじゃないだろうか。そういうことをやっていったならば、太平洋から日本海まで、今、岡山道などを走っていただきますと、「日本海まで　あと 120km」という表示が出てきます。「太平洋まで後何 km」。太平洋があって、それから日本海があって、その間に瀬戸内海があって、全体が一つのマネジメントされた地域としてこれから生きていく。ものすごく強くなるんじゃないかというようないろいろなことを考えて、道州制というものをこれからやっていこうと考えていました。というのが実は、この題を考えたころの状況でした。

そのあと状況が大幅に変わりまして、今は何となく道州制ということがちょっと後ろに引いたようなことになってしまっているというのが現状です。ただ、だからまずいということではないのです。というのは、道州制というのは一つの案である。もう一つ別の方で、例えば小沢さんなんかがおっしゃっておられるのは、もっと基礎自治体というのにたくさん分ける。300 くらいと言われましたっけ。「基礎自治体と国」という仕組みを作った方がいいんじゃないか、というふうなことをおっしゃる方もおいでです。そういうことをやると統制強化につながってしまうねというのが、私たちの感じなのですけれども、そういう中でもう一度、地方と国の良い制度というのはいったい何なのだということを、基本に立ち返って考え直すべき時なのではないか。ですから、先ほど申し上げました道州制というのは一つの下敷きにしていただいて、もう少し基本を考え直してみる時に来ているんじゃないかなということで、お手元にお配りしたようなレジュメを出させていただきたいと思います。このレジュメに沿ってこれからのお話は進めていきます。

題が「地方の活性化と道州制」というのは、これを企画したときに与えられた題ですから、そのままの題にしています。中身的には、国と地方とのより良い在り方はなんなんだということに、少し触れてまいりたいと思います。従って、題の下のところに「地方の論理と主張を考える」として、道州制をきっかけにして地方の論理と主張を考え直してみたいということで、１）、２）、３）、４）、５）とあります。

「良い道州制と悪い道州制について　良い道州制は国を甦らせ、悪い道州制は劣化に拍車をかける」。「道州制」というのを、「国と地方の制度」というふうに読み替えていただいても結構だと思います。良い制度を作って国と地方がうまくかみ合っていけば、国はよみがえってくる。ここのところがうまくいかなくて、今までみたいな、なんでもかんでも首都が吸い上げるという仕組みが続いていけば、国は劣化に拍車がかかるのです。

２番目、「地方の意義と役割を評価しなおす　この国をクリエイトしてきたのは全国の地方に育ったＤＮＡだった」ということを、もう一度復習してみたいと思います。

３番目、「首都の論理と『東京天動説』を検証する」。なんか変な議論がたくさんあるんですね。だけどこの変な議論というのが「それがおかしいという事に気付いていない事自体がおかしくはないか」。私は東京が大好きです。しょっちゅう遊びに行きますし、昨日も実は東京から帰ってきたところなのですけれども、大好きですけれども、やっぱり「あんたたち考えていることおかしいよ」ということは、きちっと言ってあげなくちゃいけないというのが３番目。

４番目、「地方の論理と主張入門　地方は、自分の目で見、自分の頭で考えて、自分自身の意志を固める」ことが大事ですね。おれたちはこういうような国を作りたいんだと。

最後、「再び良い道州制と悪い道州制について」。最初に戻ります。地方のことを地方が決めるというのはもちろん大事なことなんですけれども、本当は地方のことを地方が決めようと思ったら、国の制度に対しても、地方はこういう制度を作るべきだという声をしっかり届けていかなければいけない。そういうことを最後のところに申し上げたいと思います。

講演といいましてもいくつか種類がありまして、講演をずっと面白くしたらトークショーになります。講演を少し難しくしたら講義になります。美術館の話をしようというときは、スライドをたくさんやりながらトークショーみたいにやるのですけれども、今日はこういう話ですから、少し講義の方に近いような感じでお話をさせていただきたいと思います。

まず、「良い道州制と悪い道州制について」。道州制の話とか国と地方の話というのは、国と地方との権限争いであってはいけないのです。そうではなくて、当たり前の話ですが、より良い国を作り、クリエイトしてマネジメントしていくための制度はどうあるべきかという、そこから話は出発しなければいけない。そして全体の国の姿として、これから申し上げることはそのテーマにかなりあるのですけれども、首都がクリエイトして地方がそれをフォローするというふうな仕組みを、首都の皆さんは考えておられるようです。だけど、今、日本の国というのは、そういうふうにできてきているのではないのです。地方がクリエイトして、それを国がフォローするというかたちの国になれば本当にいいねと。地方主権の本当のかたちというのはそういうものだと思います。そういうふうなことがうまくできていくような制度を作らなければいけない。とすれば、道州制というのも、そういうことがうまくできていくような制度なのだろうかということを、考えなければいけないでしょう。ということで、最初のところの「良い道州制と悪い道州制について」という話が出てくるわけです。

５つくらい悪い道州制の例を挙げます。まず第一に「放り出し型」。まず列挙してみましょうか。「放り出し型」の道州制は悪い道州制です。２番目、「負担押し付け型」の道州制。これも悪い道州制です。３番目、「統制強化型」道州制。これも悪い道州制です。４番目、「首都独走型」。メモしていただいてありがとうございます。そんなにメモしていただくほど大事な話ではないかもしれません。５番目、「地方のミニ一極集中促進型」道州制。これは悪い道州制だねと。

まず「放り出し型」。これは道州制の議論の最初のころ、これは道州制に限らず、いわゆる地方分権議論の最初のころに、盛んに首都、東京で言われていた議論です。東京は過密になった。通勤にものすごく時間がかかる。しかも時間がかかる電車がみんなぎゅうぎ

ゅう詰めで、こんなになって来なくちゃいけない。これは大変だから、もう少し――ここが大事ですが、いらないものを地方にばらまこうという発想で、地方分権ということを考えたのです。それが地方分権の最初のころによくあった議論です。東京はあまりに過密だから、もっといろんなものを地方に出さなくちゃいけません。ですから、もちろん出すときには、東京にいらないものを放り出すというかたちで考えておりました。これが「放り出し型」。いらないものを放り出す、邪魔になるものを放り出す。こういうかたちの地方分権あるいは道州制であったのです。

そうじゃなくて、では良いものというのはなんなんだというと、「放り出し」の逆です。必要なものを私たちが取り込むかたちのものが必要です。権限移譲ということで、例えば、地方の禁漁区の境目をどこにするかという権限が都道府県に移譲された。確かそんなことがありましたですね。上から降りてくるのはそんなものなんです。だから、そうじゃないだろうと。例えば消費税に関しては、これだけのものを地方に権限をよこせ、そうすることがより良い日本を作ることになりますよと。今度ようやく、首都と地方との政策議論の場ができるようですけれども、そういう場を通じて、私たちは、例えば租税に関してはこういう権限を欲しい。教育については、あとで少し触れますけれども、ものすごく大事です。地元で地元らしい発展をするためには、これだけの権限を地方で持ちたい、文部科学省が言うことを全部聞いているんじゃなくて、こういうことをやりたい。経済、財政運営については、これだけの権限を私たちが持たなければいい地方は作れない。そういうことを地方から要求をして必要なものを取り込むかたち、これが良い分権制でしょう。いらないもの、東京から放り出されるものをパクリと食べる、これは悪い分権制でしょう。

２番目、「負担押し付け型」というのがあります。よくあるのですけれども、「あなたたちに任せるよ」と言って、任せるだけ任せて、お金も人間も何も付いてこなかったならば、負担だけがこっちに来て、事務負担ばかり増えて、県庁の皆さんがますます忙しくなって、なかなか定員は増やしてもらえませんから残業代が増えるばかりで、負担ばかりを地方に押し付けてくる、そういうふうな分権というのがあります。これは、もしもここに県内の市町村の方がおいででしたらご注意いただきたいと思うのですが、平成の大合併の結果、負担ばかりを地方に押し付けるということを県がもしもやるとしたら、けしからんとおっしゃっていただかないといけないのかな。あのへんに県の人がいますから。そういう同じことを、今度は地方分権の名のもとに国が地方に対してやってくる。これが「負担押し付け型」。そうじゃないでしょう。資源配分適正化が必要なのでしょう。資源の配分というのは、負担だけではなくてお金も人材も経済的資源も知的資源も、すべて地方と中央でうまく分け合うという適正配分型分権がいいでしょう。負担押し付け型というのは非常にまずいのじゃないでしょうか。

３番目、「統制強化型」ということを言いました。実は、これも市町村の方々よくご注意されたらいいと思うのですが、今まで岡山県には市町村がたくさんありました。これ全体を制御するのは大変なのですね。今は市がいくつになりました？随分少なくなりました。県の事務負担は随分減ったと思いますよ。だからといって、これが統制強化に結びついてはいけないだろう。今、全部で都道府県が 47 ですか。あれをそれぞれ一々説得して歩いたら多分大変だけれども、これが 10 や 11 の州に集まったら、10 人の州知事を説得したら国中がうまくいくとすればとてもやりやすいですね。そういうことが統制強化に逆に結びつ

いちゃまずいだろうということで、「統制強化型」ではなくて「自主性・自立性尊重型」の道州制。時々首都の方が地方に快いことを言ったときは警戒されたらいいと思うのですが、「地方主権」なんて口では言っておきながら、実は中身を見てみたら全然違っていたというのはよくあります。「三位一体型の改革」なんて、三位一体じゃなくて一位しかない。吸い上げしかなかった。言い過ぎかもしれませんが、地方には分配をよこさないという政策だったと、そういうふうに一部見える部分がありますね。そうじゃなくて、私たちが自主性自立性を本当に持てるような、そういう道州制がいいんだろう。

「首都独走型」、これはちょっと注意しなくちゃいけないと思うんです。「地方に地方のことは任せるよ」ということを首都の方は言います。だから、「地方は首都のことに口を出すな。地方は国のことに口を出すな」、これが裏返しになったら非常にまずい。「地方のことは地方で決めてください」ここまではよろしい。「だから地方は国のことには口を出すな」ということを言われたら非常にまずいですね。今そういう議論がいくつか出て来て話題になっています。「地方の市民が決めたことは、国は……」何て言ったんだっけ。「配慮する必要がない」じゃないですね。そのままの言葉を言ったら、だれが言った言葉か分かりますから言いませんけれども、「忖度みたいなことをする必要はない」というふうな議論があって、私たちはびっくりしたことがありました。そういう基地の問題だけではなくて、昔からこれはあるんです。ですから民主党が悪いっていうわけじゃなくて。

こういうことがありました。道路公団の改革という話がありました。あのときに、地方の首長さんたちはみんな、「これは困る」と言った。それに対して、某東京大新聞社説です。社説に何を書いたか。「小泉内閣は、地方の抵抗をいかに排除して改革を進めるかが問われる」と書いたのです。首長さんたちが「自分のところに道が必要だ」と言うことは、みんな抵抗勢力の反動だというふうに彼らは言っていたのです。地方は国のやることに口を出すなと。ここらへんはちょっと愚痴っぽくなったらまずいのですが、何となく物事がうまくいかなくなったら、「それはみんな地方の責任だ」と。そのころ盛んに言われたのは、「一体だれが瀬戸内海に３本も橋を架けたんだ。３本も橋を架けることがいいか悪いかはともかくとして」ということを、道路改革を中心的に推進した某評論家が言っていました。「中国地方、岡山県は陳情責任を取れ。瀬戸大橋を架けてくれと陳情したのだから、その責任を取れ」と。

「３本架けてくれ」なんてことを、私たちは言った覚えはないですよ。「広島に架けるよりは、淡路に架けるよりは、うちの方がいいですよ」ということは盛んに主張したけれども、３本架けたのはおれたちの責任なのか。そうじゃないでしょう。あなたの責任でしょう。そういうふうなかたちで地方のことに関係のあることも、東京が勝手に決めてくる。これに対して私たちがものも言えないというのは非常にまずいでしょう。だから、「首都独走型」、地方のことは地方に任せるから、首都のやることには地方は口を出すなというかたちのものは非常にまずい。そうじゃなくて、「全国共同体型」「全国参画型」の道州制、地方制度を作る必要があるんじゃないか。それが４番目です。

５番目、「地方のミニ一極集中化」を推進されたら、非常にまずいということがあります。今、九州でどういうことが起こっているのか。冷静に聞いて下さい。実はこの間熊本に行ったときに、熊本の経済界のトップの方といろいろお話をしていましたら、「いや、道州制というのは実にいい制度だ。だけど、九州は今非常に困っています」。ちなみに言

いますと、熊本は九州ではかなり中心的な地位を占めていましたが、今は中心的な地位を福岡が占めています。ご承知の通りですね。どういうことをおっしゃっていたかというと、「九州は本当に困るんです。福岡に州都を置いても、熊本に置いても鹿児島に置いても、いろいろ問題がある。だから、それでないどこか別のところを考えなきゃいけないんじゃないかなということも実は考えているんですよ。どうでしょう」なんて言われましたが、どうでしょうもこうでしょうも、私も分からないですから。けれど、久留米とか鳥栖とかいい街がたくさんありますよね。

とにかくそういうかたちで、覇権争いの道具にしてはいけないということを申し上げたわけです。地方のミニ一極集中を促進するのではなくて。地方の多核的ネットワークを推進するような道州制であってほしい。多核的、核がたくさんある。倉敷市ってそうですね。旧倉敷があります。児島があります。玉島があります。それぞれにものすごい歴史と風土、文化を持った町です。旧倉敷がいくらひっくり返っても、あの児島のファッションタウンのイメージを、倉敷イメージに塗りつぶすことなんかできるはずがない。むしろしてはいけないということで、児島という核は大事にしていきます。玉島という、もしかして倉敷よりも古い――もしかしてなんて言うと玉島の人は、「もしかしてじゃない。そうなんだ」とおっしゃるでしょうが、堂々とした古い昔からの伝統と歴史を持ったあの玉島を、たぶん同じ色で塗りつぶしちゃいけないだろう。あるいは今度、真備と船穂が仲間に入ってくれましたけれども、農業の先進地としてこんなに素晴らしい実績を持っている船穂とか、あるいは私だから言えるのでしょうが、大原孫三郎なんて者よりもはるかにものすごい吉備真備さんの真備とか、そういうところを同じように塗りつぶしちゃいけないでしょう。それぞれ多くの核を持っている。その核同士がネットワークを持って結ばれているのです。

備中ってそうなんですね。大きなどこかに中心があって、そこに一極集中しているんじゃないのです。高梁藩、大したことはないです。倉敷天領、大したことない、たかが５万石です。池田藩は三十何万石ですから。小さい藩では成羽も藩だったのをご存じですか。成羽藩は１万石です。そういうふうなものがお互いになって、その中から雪舟が出て来たりあるいは玉堂が出て来たりと、うんぬんかんぬんしたようなところが備中ですから、そのイメージを思い浮かべていただいたら、中四国というのは広島があって、それが全部の中心なのただろうか。三原が既に「あれ、おかしいよ」って言うでしょう。備後福山まで来たら「違うだろう」と。笠岡、倉敷、岡山、西大寺、それぞれいい町がたくさんあるじゃないですか。北の方に行ったらもう数え切れないですが、津山から、今度真庭市というのができましたけれども、勝山、いい町ですね。言わなかったからまずい町ではないのですけれども、鳥取から米子から松江から出雲から、萩、津和野……と、素晴らしいものがたくさん散らばっているのが中四国であるとすれば、そんなところが求心力がないことを嘆くのではなくて、そうだからこそネットワークを作っていくべきなのです。

さっき申し上げましたが、広域の、中四国州のマネジメントは、一極集中型のマネジメントではなくて、ネットワーク的なマネジメント、多核的ネットワークを結んでいくマネジメントができるような地域。そういうふうな地域を作るのは、たぶんいい道州制だろうなと思います。無理やりに「おれの方を向かせてやる」というような覇権主義的なミニ一極集中を作るのは、いい道州制ではない、悪い道州制だ。いずれにしても、いい道州制というのは、全国をよりクリエイティブにしていく道州制。悪いのは、首都の都合によって

押し付けてくる道州制。今のは、道州制というのをそのまま地方分権とか地方主権とかということに置き換えてもその通りだと思うのです。理想的なシステムというのは、首都には首都の責務がある、地方には地方の責務がある、首都と地方がそれぞれ懸命に自分の責務をこなしていったら、結果として国全体の姿が美しく整う、そういう制度がいい制度ですね。結果として、国全体の姿がより醜く乱れるようなシステムを作ったら困るだろう。そういうことで、私たちは今立ち止まって、良い道州制と悪い道州制、良い道州制を作るにはどうしたらいいんだろうかということを、基本から考えなきゃいけない時になっているだろうと思います。

ということで２番目です。「地方の意義と役割を評価しなおす　この国をクリエイトしてきたのは全国の地方に育ったＤＮＡだった」。今日はたぶん新聞記事を同封していると思います。朝日新聞の「時流自論」というものです。私はあまり朝日新聞系の「知識人」なんてもんじゃないと思うけれども、なんとなく出してくれたのです。ただ、これは 2004 年、平成 16 年に書いたことで、これがいまだにそのまま通用するというのは、本当に困ったことだと思うのですけれども、ざっと読んでみますとこういうことです。

「今年の１月」つまり、今から何年前かの１月ですが、「東京国際フォーラムで「ベンチャーフェアＪＡＰＡＮ」というのが開催された。新エネルギー、環境、情報通信など事業会社約 200 社以上が参加してアイデアと事業構築力を競った。参加者は全国に広がり、出展企業の約７割が東京都以外のベンチャーだった」。当たり前の話です。「京阪神や名古屋のほか静岡や岡山、広島、熊本」――朝日ですから岡山をトップに書かなかったですけれども、中には岡山も入っているよということを書かせていただきました。「広島、熊本などの出展が多かったのは予想通りだが、比較的小さな県でも何社も出展している所があり、地方の事業創成力は健在だと意を強くした。地方が新しい事業を生み出す母体になるのは今に始まったことではない。日本は元来、全国津々浦々から次々と新しいビジネスが生まれるダイナミックな国だった。全国各地で生まれ育った事業が、何年、何十年の時を経て国を背負う企業に成長し、経済を支えてきた。例えば私がかつて勤めていたクラレという会社は、岡山県倉敷市の生まれである。地元の繊維産業の伝統と、天領だった江戸時代に培われた企業家マインドが創業の背景にあった」。ここはあまり詳しく言いませんが、そうなのです。「同業の東レは財閥系の会社として東京に生まれた」というのは、登記上はそうです。三井物産の本社で設立総会がたぶんされたと思います。だけれど、繊維の関係の方ご存じだと思いますが、東レの皆さんは、自分たちの創立記念日というのは、滋賀ができたときを創立記念日と思っている方が多いのです。東レのふるさとはどこかと言ったら、「東京の三井物産のビル」と言うよりは、「滋賀」とおっしゃる方が多いんじゃないでしょうか。

その次は面白いですね。「帝人は山形県米沢市」だと。ご存じでしたか。例の上杉鷹山です。この前の「天地人」のあの大改革をやった上杉、「上杉鷹山の藩政改革で知られるこの町の歴史が育んだ事業風土と無縁ではない」、そこで帝人が生まれてきた。「繊維だけではない。世界に覇を唱えた電器、電子関連でも多くの事業が関西の自由闊達な風土の中から生まれ育った」というのは、ご存じの通りですね。むしろ東京系が少ないです。ソニーは東京ですが。「日本のリーディング産業となった自動車も、マツダは広島、ダイハツは大阪、ホンダとスズキは浜松生まれ」、これは右の図に書いてある通りです。日産と

いうのは、生まれ故郷がどこか。九州と言っていいのか横浜と言っていいのか、場合によっては満州と言っていいのか、なかなかちょっと多いですし、三菱自工さんは地元なんですけれども、あれは実は三菱重工の一部門だったのですから、なかなかそういう面では生まれがここというふうに特定できないということで、ここには出てこないのです。

「これらの創業の地はいずれも、地域の歴史の中で豊かな文化を育ててきた地域である」、「日本を支える事業は、首都よりむしろそういう地域から生まれ育ってきた」というのは、例えば美術館がそうですよ。大原美術館は倉敷で生まれ、倉敷で育った美術館ですね。大原美術館の２０年くらいあとに、東京にようやく同じような美術館ができた。というのがブリヂストンなんです。ブリヂストン美術館は、それならば東京が作った美術館かというと、実は石橋さんという方がお作りになった。石の橋ですからブリヂストン。石橋だから、そのままならストーンブリッジですけれどね。久留米の方です、九州。久留米にできたブリヂストンタイヤ株式会社という会社が、東京に移って株式会社ブリヂストンになって今の会社になった。ですから、今でも久留米にいらっしゃったら、公園の中に素晴らしい「石橋財団美術館」というのがあります。もしもお行きになったらぜひご覧になるといいです。これがブリヂストンの生まれ故郷です。久留米が生んだもの。久留米がものすごいのは、それを生んだのは石橋さんだけではないです。孫正義さんも、ライブドアの堀江さんも、中、高と久留米で過ごしています。それから美術の世界では、青木繁がそうです。坂本繁二郎もそうです。もう少しマニアックになれば、古賀春江という日本のシュルレアリスムのいわば元祖みたいな絵描き、これも久留米です。もう少し言えば、松田聖子ちゃんもそうです。非常にクリエイティブな土地柄です。久留米のＤＮＡはなんなんだろうなと、時々いろいろ考えますけれども、美術館を見てもそういうふうに全国各地が生み出している。ついでながら、国立美術館だからと言って、東京の上野にある西洋美術館を東京生まれと思わないでください。あれを作ったのは松方幸次郎さんという方です。松方幸次郎さんは神戸の事業家ですから、あれは神戸がクリエイトした美術館です。日本のいろんなものというのは、日本中の各地に埋められているＤＮＡが創り出したものであるということを、少し考えておきたいと思います。

そして、「これらの創業の地はいずれも、地域の歴史の中で豊かな文化を育ててきた地域である。これが地元に蓄積された富と一体となり、地域特有の事業家意識を生んだ。日本を支える事業は、首都よりむしろ、そういう地域から芽生え育ってきた」。これは事業だけではなくて、さっき言いました青木繁も、あるいは坂本繁二郎も古賀春江もそうです。ちなみに、古賀春江というのは、「はるえ」なんていう名前ですけれども男の人です。児島虎次郎ももちろんそうですけれども、東京がクリエイトしたものというよりも、全国各地がクリエイトしたものなのです。アートの世界はそうです。サイエンスの世界でも、ノーベル賞を取った人はみんな京都大学だったとか。みんなじゃないですけれども、湯川秀樹さんをはじめとして京都大学が続きました。「何なんだろうか」の前に、日本というのは、そういうかたちで地方がクリエイトしてきたものを、東京で育てて日本を作ってきたという構造の国だということを、やっぱり覚えておきたいと思うんです。だから、そういうかたちで地方がクリエイトする力を、これからもどんどん作っていき、保っていかなければいけませんし、それが「地方の意義と役割を評価しなおす」ということの意味です。

よく「地方経済が復活をしてきた」ということを言います。実は復活してないというこ

とを、私たちはものすごく身に染みていますけれども、「雇用が増えてきた。有効求人倍率が上がってきた。ああ良かったね。地方の経済が復活したね」ということを多くの方がおっしゃいます。たぶんそれは違うだろうと思います。そういうことを言う背景には、「地方は単なる生産基地」という認識があります。そうじゃないでしょう。地方は日本をクリエイトするエンジンなんです。石橋正二郎を生み、松方幸次郎を生み、あるいは豊田佐吉を生み、あるいは大原孫三郎もそうなんですけど、彼らを生んだのは地方ですから。日本をクリエイトするエンジンというのは、すべて地方から生まれてきているのです。すべてというのは違いますね。さっき言いましたソニーは東京生まれですから。すべてというのはちょっと違うかもしれませんけれども、そういうものが復活してきて、あるいはそういうものがしっかりと根付いていてこそ、日本が復活したと言えるのであって、「雇用が回復して、生産基地としての地方がぐるぐる回るようになった。ああ、これで日本経済は安泰」というわけではないのです。そういうふうに地方を位置付けしたいと思います。地方は単なる生産の歯車ではなくて、日本をクリエイトするエンジンだった。

クリエイトするエンジン、これは文化的な面でもそうです。ここで少し宣伝っぽいことを言いますが、去年、中原中也の生誕百年だったことをご存じでしょうか。山口県の詩人です。どうしてこういう話を突然し始めたかというと、佐々木幹郎さんという私たちが非常に親しくしている詩人の方が、それで去年は１年間そっちにかかりきりだったんですけれども、この佐々木幹郎さんと音楽の小室等さんなんかが一緒になって、倉敷で「倉敷インスピレーション」というイベントを何年か重ねております。今年はもう一度これが倉敷に戻ってきます。去年も実は戻ってきたんですけれども、非常にクリエイティブなかたちで戻ってきます。そして佐々木さんが育てている、東京芸大にいるとても若手のミュージシャンたちのグループも一緒に戻ってきます。それと同時に、今年はまた、１年抜けていたのですけれども、谷川俊太郎さんが一緒に戻ってこられます。子どもたちのイベントと大人たちのイベントをされます。

これはともかく置いておいて、この佐々木幹郎さんという方が、中原中也に大変入れ込んでいる。いいですか、ここが大事です。中原中也がどうしてあの山口の地でキラキラとした才能を発揮することができたか。「防長新聞」という新聞があって、そこの文芸部に目利きの選者がいて、その人が小学生、中学生の中也が投稿してくる短歌をどんどん防長新聞に発表したのです。そのことによって中也はどんどん才能を伸ばして、そしてやがて京都に行って、小林秀雄さんと同じ恋人を取り合ったりするのですけれど、それは後の話です。そうやって、地方の新聞にいる目利きの選者が中原中也の才能を育てたのです。そういうものが地方にあることが大事なんです。彼がいなかったら中原中也はたぶんいなかった。あるいはいたかもしれないけれども、これだけの詩人にはなっていなかったかもしれない。文化の面でもそうですし、経済の面でもそうですし、そういうふうなかたちで地方からいろいろなものをクリエイトして育てていく。そういう仕組みがきっちり整って初めて地方は復活してきたということが言えるのであって、工場が動いただけではちょっとまずいですね。

この新聞記事の次に書いてあるのは、さはさりながら、この時点でそういう全国からいろんなアイデアを持った連中が集まってきたんだけれども、それを伸ばすための仕組み、例えばＴＬＯと言われているライセンス機構ですとか、あるいはベンチャーキャピタルで

すとかは……、下から２行目の右の端のところに、「23 団体参加していたが、その中で東京以外のものはたった１社だった」とあります。これ実は浜松のＴＬＯです。浜松というのはすごいです。スズキ、ホンダもそうですけれども、今でも浜松ホトニクスとか、すごい事業を育てています。テレビの電波を最初に発信したのは浜松だったというのをご存じですか。そういうところでも非常にクリエイティブな力を持った街なんですけれども、そこのＴＬＯが１社来ていたのです。

だから、今全国津々浦々でまだクリエイションな力は衰えていないけれども、倉敷も悩みですね。売り上げ規模が３億とか５億ぐらいになったら、「もうこうなったら東京に行かなきゃだめなんですわ」と言って東京に行ってしまう会社があります。児島はそうじゃないです。「自分のところで頑張ろう」と言って頑張っていただいている、本当に素晴らしい所ですけれども。

「しかし、東京での地方経済を巡る議論は主に、地方企業の稼動率とか雇用対策にとどまっている……。為政者がこのような認識では日本の再生はおぼつかない」。けれども、残念ながらそういうふうな見方が非常にたくさんされています。クリエイションのエンジンとしての地方の意義をしっかりとつかまえて、そういうふうなものを促進していくような制度を作りましょうという意識はあまり強くない。本当に残念ですというのが、その３番目のところです。「首都の論理と『東京天動説』を検証する」。

さっきも言いましたけれど、私は東京大好きなんで、決して悪口ではありませんが、だけれども、ちょっとおかしいというか、慣れてしまっていると言うべきなんでしょうか。天気予報がありますよね。今はあまり台風は来ないですけれども、九州の南海上に台風がいるとします。九州のずっと南のほうに台風がいる。南よりもちょっと向こうにずれたところに台風がいて、いずれやってくると仮にしますか。テレビの天気予報、台風情報を見てください。この台風が真っすぐ北に行ったらどこに行くと思いますか。真っすぐ上に行って、九州の横を通って日本海のほうに抜けていく、と思ったらそうじゃないんです。驚いたことに真っすぐ北に行くとなると、この台風はピューッと右のほうに曲がって九州を直撃するのです。なぜですか。なぜかというと、どの放送局のどの日本地図を見てもそうなんですけれども、経線は東京で真っすぐに立っているのです。だから台風の中心のある九州の南海上では斜めになっています。右向きが斜めになっています。だから真っすぐ北に行ったらずっと上に行くかと思ったら、右上に行っちゃって九州にドカンと直撃してしまう。おかしいでしょう。「台風の中心がそこであるならば、台風の中心のところで経線を真っすぐ立ててください。東京ではちょっと左にゆがむかも知れませんけど、それはしょうがないでしょう」という発想を東京の方は決してしませんね。どこに台風があろうがそんなことは知ったこっちゃない。経線は東京で真っすぐ立ってなくちゃいけない。首都ですから。そういうのを「東京天動説」と呼んでいます。

台風情報ぐらいでしたらまだそんなにも害はないですが、あまり政治の世界に踏み込みたくないですけれども、そういう発想で日本のことを決められたら非常に困るということがいくつか出て来ています。「事業仕分け」というのがありました。あれはほとんど全部が東京の論理、首都の論理でばさばさ切られています。ここのことでついこの間、こういうことがあります。ブッパタールという町がドイツにありまして、非常に美しい町です。そこに日本人の指揮者がいます。それが非常にいいオーケストラを育てました。このオー

ケストラをこの日本人の方が率いて今年倉敷に来ます。それと同時に、これはブッパタールの町で、子どもたちに対する素晴らしい働きかけをしているのです。そこで、倉敷からそのブッパタールにいる日本人指揮者のところに中学生に何人か行ってもらって、そこでそういう働きかけを体験してもらって、そしてこのオーケストラが倉敷に帰ってきたときに、何か一緒のことをやってもらおうということを考えて、作文を出してもらって面接をしました。素晴らしいです。本当に倉敷の子どもたちは素晴らしいです。その中にあった一つのことなんですけれども、「自分がそういうふうなことに目が開いたのは、学校にオーケストラが来てくれたからだ。学校にオーケストラを派遣するという、そういう仕事をしてくれて本当にありがとうと感謝しています。来年からこれがなくなるようなのでとても悲しいです」ということを書いてありました。事業仕分けですね。仕分けられて、こんなものは不要とやられて来年からなくなっちゃうみたいです。よく分かりません。僕は詳しいことは知りません。子どもの書いた作文をそのまま引用してすいません。もしかしてちょっと正確でなかったら申し訳ないのですが。

現場のことをほとんど考えないで、そういうことをやられたら非常に困るんですけれども、この間すごいことがありました。これは政治の話ではありません。「地方の空港なんていらないよ」という話がありますね。さっきの瀬戸大橋の話と同じで、「岡山空港が大事だ」ということは一生懸命陳情しましたけれども、「ここにも、あそこにも、あそこにも空港を作ってくれ」なんてことを私たちは陳情していないのです。あっちやこっちやできちゃった。「こんなものは無駄だね」というのが、東京でははやりの議論です。そういったものを議論しているときに、「では、皆さんの意見を聞いてみましょう」ということで出て来た意見にびっくりしました。どういう意見であったか。「いや、地方に空港はいりませんよ。だってね、東京から新幹線で行けるところに空港なんかいらないでしょう」という意見もありました。びっくりするでしょう。東京人の便利のために、静岡とか長野に空港を作るわけではないですよね。全国放送のラジオだったのですが、「東京から新幹線で行けるところに空港はいらないでしょう」という意見が堂々と紹介されるというのはおかしくないですか。まさに「東京天動説」ですね。

さっき教育のことを少し言いました。私は県の教育委員をさせていただいて、研修に行ったときにこれもびっくりしたことがありました。ちょうどいわゆる「ゆとり教育」というものが始まったころです。念のために申し上げますが、「ゆとり教育」が悪いと言っているのではありません。私は実は「ゆとり教育」を受けました。戦後、直後のころに、京都の教育大学付属京都小学校というところに入りまして、そこでは戦後新教育の実験みたいなものがガンガン行われていて、社会科の時間なんか、先生は教壇に立ったことがないです。私たちがいろいろ調べてきたことをみんな生徒が発表していて、先生は教壇に立っていません。ついでに申し上げますと、それだからほったらかしにされたかというと、そうではありません。これは私の個人的な体験ですが、私はそういう学校に育って、仲間たちと一緒に食料の配給、米の配給です。当時お米は食料公団というところが配給していました。その配給のクーポンを持ってなきゃお米が買えなかった時代です。その仕組みを調べるということで、忘れもしない西大路七条ぐらいの食料公団というところに行こうということで、４、５人の仲間たちと行きかけていたところで、先生、この先生は本当に優しい先生だったのですが、呼び止められまして、「君、どこに行くの」「ここに行きます」

「何聞いてくるの」と言われて答えられなかった。「何聞いてくるの」と言われて答えられなかったんです。そうしたらすごく怒られました。日ごろは温厚な先生が、「お前らなんだ。大人がお前らのために時間を割いてくれているということを何だと思っているんだ。それも心得ないで、質問することも考えないで、のこのこ出掛けて行くのは何事であるか。お前ら行くこと相成らん」と言われて、ほかのグループは方々に行っているんですが、私たちのグループだけが教室で１時間自習させられました。素晴らしい先生でしょう。そういうのが、私たちが受けた新教育だったのです。だからというわけじゃないけれど、こんなふうにペラペラしゃべっているのは、そういう教育の成果なのかもしれませんが。

だから、新教育を悪いと言っているのではありません。素晴らしい教育であります。その中で、ゆとりの教育が悪いと言っているわけでもありません。ただ、私が何にびっくりしたかというと、その時に講師の先生がこういうことをおっしゃいました。「自分は小学校の子どもたちを連れて、夏休みに北海道の原野のところに行くことにしている。そうしたら子どもたちは何をするかというと、どうしたらいいか分からなくて、そこらへんの木の枝をポキポキ折ったり、そこらへんの花を踏みつぶしたりしている。こういう子どもたち、かわいそうでしょう。何かすごいストレスを持って、北海道に行ったらポキポキ枝を折ったりする。そういうふうな子どもたちに詰め込み教育をしちゃいけません。ゆとりの教育をしなきゃいけません」ということを先生は言われました。新米だったですから質問できなかったですけれども、ちょっと待ってくださいよ。それは、先生が東京から北海道に連れて行く子どものことでしょう。北海道の原野の学校で、一生懸命勉強している子はどうなんですか。この子たちにも、東京の子たちと同じようなゆとり教育をするんですか。それでいいんですか。「ゆとり」は毎日彼らは体験しています。牧場で草を刈ったり、牛の世話をしたりして、いろんなことをやって体験してますから、そういう子たちには学校で詰め込みを――というのはおかしいかもしれませんが、東京でそういうストレスの元にある子どもたちと、北海道の原野の中で何とか自己実現をしたい、一生懸命勉強したいと思っている子どもたちとを、同じものさしで考えたらいけませんでしょう。

いつか岡山県でもありましたが、「未履修」という問題がありました。文部科学省が決めてくるその通りのことを教えなかった。未履修というのは、文部科学省が「これを教えなさい」と言ったことを教えなくて、あと居眠りしていたんじゃないんですよ。そうじゃなくて、「これを教えるよりはこっちを教えるほうが、たぶん子どもたちのためになるだろう」と先生が考えて、これを教えないでこっちを教えたという話でした。そういう先生たちを非難できるんだろうか。だけどあの時には、「文部省の決めてくるこの教育課程というのは法的強制力があるから、これに従いなさい」と伊吹文部大臣が言われまして、従いましたですよ。これはもう法の問題、コンプライアンスの問題ですから。だけれど、そういうかたちで全部決めてくるのがいいんだろうか。

何となく、「東京の言うとおりにしたらうまくいくはずだ」と彼らは思っているみたいなんです。こんな例ばかりしたら面白くなくて、うっぷんが募るんだけれども、奈良県で産婦人科のたらい回し事件というのがあったのをご記憶でしょう。救急車で産婦人科の病院に連れて行こうとした。ところがどこでも受け入れてくれなくて、この方は確か流産か死産かをされたんじゃなかったですかね。本当に痛ましい事件が起こりました。東京の、名前は言いませんが今は野党になった当時厚生労働大臣が、奈良県の知事さんを呼びつけ

て、「お前らなんだ。もっといろいろ考えて、そういうことが起こらないようにしろ」としかりつけました。多少私もそのへんの事情を知っていましたから、しかりつけるのはおかしいんじゃないだろうか、そうじゃなくて、「奈良県知事さん、医者の養成のやり方を間違えました。研修医の制度を間違えました。東京が間違えた結果、奈良県にご迷惑をおかけしました。来年改善するとは約束できない。３年でできるかどうかは分からない。だけどせめて５年中には何とかそれを改善しますから、それまで知事さん頑張って我慢してください。その間霞が関も――永田町か霞が関かどっちか知りませんけれども、一生懸命頑張ってこれを改善しますから」というふうにおっしゃったら、それで良かった。そうじゃなくてしかりつけたというのに、私はびっくりしましたけれども、しばらくしたら東京で同じ事が起こりましたね。その時に、「おお、厚生大臣どうするか」と僕は楽しみにしていたんですよ。東京都知事を呼びつけてどう言って怒るかなと思って楽しみにしていたら、怒られなかったですね。なんとおっしゃったかと言ったら、「もしかしたら制度が違うのかもしれない。考え直さなくちゃいけない」と。

奈良県で起こったときには知事をしかりつけておいて、東京で起こったときには制度が違うかもしれないと言い出したというのは、これは何事ですか。東京の言うことを聞いていたら、地方は何でもうまくいくはずだと。そうじゃないでしょう。これも一種の東京天動説ですね。そうじゃないよということを、私たちの方からいろいろと話をしてあげなくちゃいけない。もちろん、産婦人科の問題とか、あるいは近畿地方のいろいろな医療体制の問題とか、今申し上げたような単純な話ではないところがいろいろありまして、大学間のいろいろな勢力争いもありまして、それはあるんだけれども、そういうことで「東京天動説」を押し付けてもらっては困る。地方は歯車ではない。歯車ではなくて、日本をクリエイトするエンジンだ、ということをしっかり東京でも認識をしてもらった上で、いろんなことを考えていただかなければ困るだろうということです。

そういうことを考えていくのが、四番目の「地方の論理と主張入門」なんです。「地方は、自分の目で見、自分の頭で考えて、自分自身の意志を固める」。地方は現場の論理です。首都の論理は何であるべきか。たぶん仕組みを作るのが首都の論理でしょう。仕組みを作り、それを制御し、それを働かせる資源を配分する、これが東京の首都の機能ですね。仕組みを作って、それを制御して、それをうまく働かせる資源を配分する。首都の機能というのは、それだけはないですよ。もちろん外交だとか、安全保障ですとか、国の全体の経済政策ですとか、全体的な雇用対策などいろいろありますけれども、そういうことすべてについて制度を設計し、そしてこれを制御して、これをうまく機能させるように資源を分配する、これが首都の責務です。安全保障についてもそうだということで、今沖縄でいろいろ問題になってますけれども、経済についてもそうです。こちらは現場主義です。そして、現場がうまく働くような制度を作り、それをうまく動かすのが首都の責務です。

まずなかなか現場の声が届かない。こういうことがありました。自民党の総裁選挙というのがあって、あれは案外オープンないい選挙で、全国で総裁候補がいろいろと話をして回っているのが報道されましたが、松山か高松かどちらかで演説会があったときに、そこに集まった人たちにずっと意見を聞いていました。ほとんどの方がどう言ったか。「一番の問題は私たちの生活です。この生活を何とかしてください」という声が圧倒的だったのです。「生活が第一」というスローガンを掲げて大勝利をした党がほかにありましたけれ

ども、「生活が一番大事です」ということを松山の人たちは口々に言っておられた。東京のキャスターはこれを受けて「松山の人はこう言っています。では、町の声を聞いてみましょう」。明らかに銀座だと思いますが、何が問題ですかと首都の声を聞いたら、花を付けていくのですが、圧倒的に年金問題だったんですよ。生活の問題っていうのはポツポツ。東京で銀座ですからそうでしょう。「町の声は年金問題ですね。それじゃ」と年金でいっちゃった。地方の松山の市民の生活は置き去りにされてしまった。そういうかたちで報道もされていますから、そういう現場の声は届かないのです。

もう一つとても大事なのは、首都の機能は、仕組みを作り制御して、そのための資源を配分することだと申しました。資源の配分には特に触れません。地方で公共投資をするのは悪いことだということになっているようですから、地方は、道も橋もトンネルも港も何も作っちゃいけないということになっているようですから、それに対して今キャッキャ言ってみても誰も聞いてくれないみたいなので。言ってますよ。東国原氏だけじゃないですよ、言っているのは。だけれども、それはちょっと置いておいて。資源配分以外のことについても、仕組みを作るということとこれを制御するということについて、はっきり申し上げて、知性と感性が劣化していると考えざるを得ないです。これは私が言っていることではなくて、東京大学元総長の佐々木毅先生、たぶん政治学の専門家は分かりますね。山陽新聞に書いておられました。私は佐々木先生に、山陽新聞じゃなくて朝日新聞に書いてよということをお願いしたんですけれども、あいまいに笑っておられましたけれども、何と書かれたか。ある選挙の後です。「この選挙の結果を見ても明らかなのは、今首都のクオリティーの低さが日本全国にものすごく迷惑をかけている。そのことがこの結果からも読み取れる」ということを、ある選挙の後で東京大学の総長先生が山陽新聞にお書きになりました。たぶんネットで検索したら出てくるでしょう。「知性と感性が劣化している」というのは、たぶんそういうことでしょう。仕組みを作りそれをうまく制御する、その仕組みがうまくいっていない。

ただ、これは首都だけの責任というふうに言っちゃいけないんでしょうね。私は政治家ではないですから平気で言いますが、もしもそういうのをそのままほったらかしておくとしたら、これは選挙民のレベルの低さにほかならない。有権者のレベルが低いからそういうことになっちゃうんだということになりかねないですから。もっと先にいくと、有権者のレベルが低いからそういうことになるんだから、選挙じゃなくて、もっとほかのことで政治を動かそうなんて人が出て来たら、えらいことになりますね。ヒトラーさんという方は、ちなみに申し上げておきますが、非合法なことは一切せずに、ワイマール共和国という民主主義のお手本のような共和国の制度と法律制度に従って、あらゆる合法的なことを積み重ねて総統になった。その後のことは知りませんよ。なるところまでは。ということを、これも私が言っているのじゃなくて、有沢広巳先生という経済学・統計学の大家の先生がおっしゃっておられます。「選挙民は愚かである」なんてことを、共通認識にしちゃったら大変なことになりますから、日本の国の根幹が揺るぎますから、そういうことが言われないように賢明な選択をしていかなければいけないのです。

ところが、その仕組みの制御ってそう簡単じゃないんですね。一つの仕組みを動かしたらどこがどうなるか、これは非常に複雑に絡み合います。単純に言ってしまえば、予算の執行を停止したらデフレになる。今の総理大臣は経済学部の出身じゃないそうですが、大

学の経済学部の問題じゃなくて、中学校の社会科の問題ですね。だったら、そのようにならないようにどういう手を打つのという政策を交えて実施をしていただかないと、こっちだけやめた、デフレ対策をやらなかったとなったら、デフレになるのは当たり前でしょう。何カ月かやってデフレだデフレだと騒いでおられますけれども、メカニズムっていうのはそうやって動かすもので、難しいです。はっきり言って、そう単純には分かりません。

ドイツが、戦後あの荒廃の中から復興してきたときに、当時のエアハルトは何をやったか。通貨改革と税制改革をやりました。通貨改革は分かりにくいですよ。経済学部の方ご存じでしょうが、その前にあったブンデスマルクという通貨をやめて、新しいドイチェマルクという通貨を作った。この通貨を作るときに、金融機関にはこうする、投資家にはこうする、ああするこうするで、かなりきめ細かく、ある意味で不公平な手段を取った。それと同時に税制改革をやった。その結果どうなったかというと、インフレがピタッと収まって労働者の労働意欲がぐんと高まった。西ドイツですよ。東ドイツじゃないです。西ドイツは世界に冠たる貿易国になった。単純化し過ぎちゃまずいですが、どこが分かりにくいかというと、どういう通貨改革をやったらどういうメカニズムで、金利が、何がどうなってインフレが収まるのか。ここは単純じゃなくて、非常に難しいです。だけどそういう難しいところを読んで読んで読み切って、そしてそういうポリシーをやったからドイツはよみがえっていった。

人気のある政策をやればいいっていうことじゃないですから。これから税制の議論、消費税の議論が始まるようですけれども、これは選挙民である私たちも、じっくり考えておかなくちゃいけないところだろうと思います。谷垣さんが前から「これは上げなくちゃいけない」と言っている。「あいつはこんなことを言うから悪いやつだ」と言っていいのか。たぶんそういうことではなくて、本当のメカニズムはどうなんだということを、私たちが一生懸命読み解かなくちゃいけないでしょう。

池田勇人さんという総理大臣がおられて、所得倍増計画、私は大学生だったですけれども、「こんなのうまくいくはずねえ」と思ったらうまくいっちゃってびっくりしましたけれども、あの方は、そのことを非常にしっかりと読んでおられた。だから、金融引き締め政策をされるときに、「これは副作用が起こる」と。副作用が起こるけれども、当時は「国際収支の天井」というのがありましたから、これを突破しちゃうと日本経済破産状態になりますから、そんなことになっちゃ大変だということで、その前に金融の引き締めをやる。副作用が起こる、それは分かっているけれどもあえてやらざるを得ないということをされた。池田勇人さんは元大蔵官僚ですからね。ちゃんと読み切ってされたのは良かったけれども、そのときに池田さんは何とおっしゃったかと言うと、「中小企業の３人や５人、首をくくる人が出るかもしれないけれど、仕方がない」と言っちゃったんです。この言い方はまずいだろう。この言い方はまずいだろうけれども、副作用が出るということを意識してポリシーをされた。それに対して、もう打つような手だてはないという思いを、自分の心の中に込めながら政策をされた。そのことは、私はやっぱり偉かったと思います。人気取りじゃなくて、経済の流れを動かすというのはそういうことですから。仕組みを作ってそれを制御する。時にはブレーキをかけなくちゃいけないというのは、そういうことですから。そういうことをあえてやるのが首都の責務でしょう。そうやってできたものをうまく動かしていくのが、私たちの責務だろうと思います。

もう一つ、教育について一つだけ言いますと、文部省の一斉テストというのはあんまり信用しないでください。確かに一つのものさしですけれども、万能のものさしじゃないです。例えばアインシュタインという人がいます。あの人は、あのテストを受けたらまず零点でしょう。零点じゃないかもしれないけれど、ものすごく点数が低いはずです。この人は、学校の成績がものすごく悪かったのです。我田引水しているわけじゃないけれども、学校の成績が悪くて何をやっていたかといったら、モーツァルトが大好きでバイオリンを弾いていました。モーツァルトが大好きで、音楽少年でバイオリンばっかりやっていました。それが将来あのクリエイションにどうつながったかは、私にはよく分かりません。大脳生理学者に聞いてくださいということですけれども、「お前それダメだろう。テストはこうやったら点数上がるよ」というふうなことをアインシュタインに教えていたら、たぶん相対性理論は生まれてなかったかもしれない。そうじゃなくて、「好きなバイオリンをどんどんやれ」と言ったからというのは言い過ぎかもしれませんが、アインシュタインはあれだけのことができた。ですからもちろん、悪いものさしではないです。いいものさしではあります。問題を私も見ましたけれど、いい問題です。だけれども万能のものさしではないということは、考えておいていただければいいと思います。

それだけではなくて、安全保障や外交なんかについても、実は地方の言うことを聞かないというのは間違っています。例えば、鈴木宗男さんという方がおられて、サハリンかどこかに「ムネオハウス」というのを作ったという話がありました。東京のメディアにはバンバンたたかれました。けれども北海道の鈴木さんが、当時のソ連、ソビエト社会主義連邦共和国というのがすぐそこにあって、そこと境を接している北海道にいて、あそこに友好の家を作らなければいけない。それを北海道の道民はみんなで、「そうだね。切実だね」と思った。そのことに対して中央政府は一切の予算処置をしなかった。しょうがないから自分で「ムネオハウス」を作った。いいことか悪いことかはともかくとして、何かというとミグが飛んできてスクランブル発進をしていく、その恵庭基地が目の前にある北海道の人たちが思っている安全保障に対する考え方の中で、サハリンと友好の何かを作んなくちゃいけないという思いを無視して、日本の安全保障を考えちゃいけないでしょう。

今あえて北海道のことを言ったのは、反対の端のことを言うとあまりに生臭いからですが、では反対の端のことはどう考えたらいいのかというのも、なかなかいろいろ難しい問題です。例えば、鳥取あるいは島根に行かれたら、すぐそこに竹島というのがあります。竹島を「ドクド」と向こう方はおっしゃるようです。そして、ハングル文字で書いた缶が流れ着いて、その中には何か得体の知れない液体が入っている、というのを目の当たりにしている人たちのマインドを無視して、日本の安全保障を考えていいんだろうか。安全保障だけではないです。外交もそうです。決して、北東アジアを敵視しろということを言っているわけじゃありませんよ。誤解しないでください。そういうことを客観的に考えながら、全国の津々浦々の安全保障を考えながら、日本の国の進路を考えなくちゃいけないでしょう。東京が安全だからいいって、そんなもんじゃない。これは外交についても同じことです。あらゆることについて、全国津々浦々の考え方をしっかりとくみ上げながら、国のポリシーを作っていただきたい。そういうことが地方の論理と主張、経済についてもいろいろ言い始めたらきりがありませんけれども、現場の考え方というのをしっかり反映したことをやっていかなければいけない。さっき悪い道州制のところで最後から２番目に言

った、「首都独走型」はダメだよということは、そういう意味です。地方の、国のポリシーに対する参画をしっかりとやっていく道州制でなければいけないというのはそういうことです。

そして、一番最後の５番目、「再び良い道州制と悪い道州制　地方のことは勿論、国全体の制度の設計にも『地方の知恵と意志』が不可欠になる」。本当に、それを無視して制度設計をされたら非常に困ります。例えばさっき言った医療制度の問題はそうですね。日本全国でどういうことが起こるのかということを考えずに、競争原理をバーッと導入して、強いところにばかりいいお医者さんが集まるというような仕組みを作ったら、日本はどんなことになるんだと。地方にいたら分かるはずです。「これは大変だぜ」とたくさんの人が言っていましたから。けれども、そういうことは関係なしに政策が行われてしまう。

さっきの話の続きをします。驚いたことには、東京でそういうことが起こったときにということを申し上げました。東京でそういうことが起こったときに、東京都知事を呼びつけてしかりつけることはしないで、「もしかしたら制度がいけないかもしれない」ということで、制度を見直す審議会だか委員会だか知りませんけれども、そういったものが作られました。そのときにどういう声明が発せられたか。「これはいろいろな問題が起こったので、地方の大学の先生もこのグループの中には入れなくちゃいけないね」ということを言われました。「手遅れだぜ」と。問題が起こって誰かが流産するのがどうこうじゃないですが、それがあったから地方の大学の先生をその審議会に入れるんじゃないでしょう。最初に制度設計をするときに、九州大学でもいいし山口大学でもいいし島根医大でもいいですから、そういう方を入れておかなくちゃいけないでしょう。そういうことですね。だから制度設計をするときに、地方の意見を聞かずに制度設計をしたら大変だよということなのです。

道路のことばかりやり玉に挙げるわけではないですが、道路公団の審議会の中のある委員の方が、私もそれまでは非常に尊敬をしていた委員の方ですが、こういうことをおっしゃいました。「東京生まれ東京育ちの私には、地方の首長さんたちの言っていること分かんないのよ」と。ああ、いけない、女言葉で言っちゃいました。女性の方ですが、審議会には女性が２人だか１人だかおられます。道の問題というのは地方にすごい大きな影響がありまして、日本の国全体にも大きな影響がありますから、「私には地方の知事さんや市長さんの言っていることが分かんないから、私はこの委員をしている資格がない。辞任します」とおっしゃるなら話は分かるのです。でも、そういうのじゃなかったのです。「分かんないのよ。だから無視するわよ」という感じで、まったく地方を無視した仕組みができてしまったのです。

ものすごく悲しかったのは、そのちょっと後で、これがいいか悪いかはともかくとして、道路特定財源というのがやめになるという話がありました。「困るねえ」ということを、全国の知事さん方がおっしゃいました。「いや、困らないよ」とおっしゃった知事さんが確か３人おられたと思うんですけれども、お一人は東京都知事さん。東京の道は今いいですから。今度もう一つ新しい環状線がとうとう開通するようですね。たぶん「道路特定財源をうちは使う必要がねえから、もういらないよ」って感じでしょう。もう一つは神奈川の知事さん。当時の総理大臣のことをうんぬんかんぬん言いたくないですけれども、総理大臣のことは置いておいても、横須賀の選挙区の方ですがそれは置いておいても、ワール

ドカップの決勝戦が横浜スタジアムで行われたときに、いい道がバシッとできました。同じようなことで、冬季オリンピックのときにいい道がバシッとできて、関越道だ中央道だと２本も高速道路がつながって、財源は十分に使ってしまってもういらないという長野県の知事さんも、ほかの知事さんとは違って、「あれは一般財源化したらよろしい」とおっしゃいました。己のところが使ってしまったからもういいよというのは何事だ。なんかちょっと悲しい気がしましたけれども、そういうことじゃないでしょう。日本の国全体の設計に対して、地方はもっと声を挙げていかなければいけないのではないでしょうか。

そういうことで、もう時間が尽きてきましたけれども、結論的に申し上げます。地方分権ということで、悪い分権でいくつか言いましたけれども、国が責務から逃げる、こういう分権はやっちゃいけません。逃げない。地方の声を聞いてきっちりとした制度を作る、これも必要です。と同時に、地方も自分の責務を果たさなくちゃいけない。最善の制度に、地方の視点で「こういうふうな制度を作ってください」ということを提言していくことも地方の責務ですし、できたものの中で、現場として最善の力を尽くすというのも地方の責務です。どうも日本の国というのは、本社ビルばかりがピカピカきれいになって、工場も研究所もさび付いているような、国・会社のようなイメージになっているような気がしてしょうがないです。しかも、「知性と感性が劣化している」なんてことを言いましたが、本社ビルの中でやっている人たちが、本当に会社の将来のことを考えてやってくれているのか。あるいは、こそくな小競り合いをくり返すだけに終わっているのか。そこらへんもよく分かりませんが、とにかく本社ビルばかりがピカピカで、その中にいる人たちの知性も感性も劣化していて、工場と研究室はさび付いている、そんな会社の株をもし持っておられたら、ただちに売られたらいいです。そして日本の国がそういうふうにならないように、今日５つの項目で申し上げましたが、地方は本当は自分たちの機能というのは、日本の国のクリエイションのエンジンになって機能することだということを自覚する。首都もそのことをしっかりと認識をして、新しい地方の制度を検討する。そういうふうにして検討したら、その結果が道州制ということになるのか、良い道州制になるのか、あるいは基礎自治体中心の制度になるのか、それはじっくり議論をして決めたらよろしいでしょう。ただ、いずれにしても、なんだかんだと文句ばっかり言ってもしょうがないことで、私たち自分たちがしっかりしなきゃだめよということがすべての基礎ですので、倉敷も岡山も津山も笠岡も、みんな頑張ってまいりましょうということを最後に一言申し上げまして、誠につたない話でございましたが、終わらせていただきます。どうも長い間ご静聴ありがとうございました。